

○緑友会福岡県議団 一般質問

(耶馬日田英彦山国定公園のブナ林再生について) 三十三番 神崎 聡

皆さん、こんにちは。緑友会福岡県議団の神崎聡です。

「山に登るのは努力の一步、人生をひらくのも努力の一步」であります。本県の霊峰英彦山のブナ林が危ないとの地元からの陳情がありました。

そこで、母校県立田川高等学校時代の恩師で、本年度「みどりの日」自然環境功労者環境大臣賞を受賞されました熊谷信孝先生に現況をお尋ねし、県環境部自然環境課・福岡県保健環境研究所の協力を得て、家族を伴なって、英彦山に登ってきました。知事も小中学生の時に英彦山登山をされたと聞いていますが、現場主義の知事同様に、百聞は一見に如かず、現地を目の当たりにしての質問であります。

霊山英彦山は日本三大修験道の一つで、福岡県を代表する山であります。県では、豊かな自然環境を守るため、英彦山の絶滅危惧種の植物の保護、保全活動に力を入れて頂いております。

英彦山のブナ林は表日本型と裏日本型が混在する極めて希な群落として国と県の貴重群落指定を受けています。山頂付近、中岳から北岳一帯に広がるブナ林の自然林が広がり、その林床を九州では珍しいクマイザサが埋め尽くしているのが特徴で、西日本有数の美林であります。平成3年の大型台風17号、19号で英彦山は壊滅的な被害を受け、その後遺症とニホンジカの被害でブナ林の衰退や枯損が目立つようになりました。

県のレッドデータブックでも保全対策が必要な群落とされており、地元ではブナ林の再生を目指した活動が行われています。

原生林としてのブナ林は多様な動植物が生息し、私たちにとっても、空気の浄化、土砂崩れの防止、水の安定供給など様々な自然の恩恵を受けています。従いまして、ブナ林の衰退は、動植物のみならず、地域で暮らす私たちにとって、計り知れない影響を及ぼすことを意味します。

そこで知事にお尋ね致します。

県職員の方と一緒に、ブナ林が衰退する英彦山の実態を見てきましたが、大変、危機的な状況でありました。そして、職員の方の説明で、森林を守る、県の地道な研究や活動も拝見させて頂きました。

最初に、英彦山のブナ林が荒廃している状況や衰退の原因、その対策など知事の認識も含めてお尋ね致します。

ブナ林は50年で花を付け、70年で充実種子を付ける息の長い取り組みであります。育苗・植樹を県として行なっていくことについて、どのようにお考えなられているのかお尋ね致します。併せて、本県として耶馬日田英彦山国定公園のブナ林保全の取り組みにおいて、地元やボランティアへの支援と連携についてお尋ね致します。

わが会派の代表質問の中で森林環境税について質しましたところ、知事は、市町村、関

係団体、そして県議会、県民の意見を聞きながら、今後のあり方を検討するとの、前向きなご答弁でした。知事のご答弁を受けて、農林水産部長にお尋ね致します。

森林環境税は、森林を巡る環境に対して依然として様々な課題が残されていることから、隣県の大分県をはじめとして既に森林環境税の取り組みを継続実施されています。継続した他県では、税率や適用期間、用途の拡大に対して、継続後、どのようになっているのかお尋ね致します。

県では、森林環境税による事業の内容を県民に明らかにし、その透明性を確保するため、森林環境税事業評価委員会があります。本年度は6月1日に開催され、事業実績や荒廃森林事業の効果調査など話し合われておられます。今後の同委員会のスケジュールや議題ついて、どのような内容を検討されていかれるのかお尋ね致します。

本県では森林環境税を活用して、荒廃森林再生事業に取り組んでいますが、この事業は荒廃したスギ・ヒノキ人工林の再生が対象となっており、英彦山のブナ林再生には直接活用できません。

そこで知事にお尋ね致します。ブナ林を再生するため、どのような財源が考えられるのでしょうか。また、森林環境税と国庫補助を併用した事業を行っている県も多いと聞いていますが、他県のこのような取り組みを、知事はどのように評価されているのかお尋ね致します。

森林環境税は各県レベルでの取り組みとなっておりますが、自然環境は各県だけの問題ではなく、国全体の問題でもあります。国と県が連携を図り、より一層森林整備を推進することをお願い致します。

次に、有害獣対策について、ここではシカの抜本的解決策についてお尋ね致します。とにかく有害獣対策においては、なかなか抜本的な解決策が見つかりません。そもそもシカが増加した原因は、天敵であったオオカミの絶滅と人間・狩猟者の減少だと言われています。今、県では捕獲計画の策定や侵入防止柵の設置方法などの現地研修会の開催、あるいは銃猟免許取得者の確保を図るなどの対策を積極的に取り組んでいます。それでもシカは、その数をどんどん増やしています。そこで解決策として注目を集めているのが、絶滅したオオカミを放ち、元の自然生態系を回復させるという議論であります。

実は、10月23日に私の地元、添田町民会館で「九州・英彦山にオオカミを取り戻せ」と題して、「日・米・独オオカミフォーラム」が開催されるそうです。

一般社団法人日本オオカミ協会では、全国的に獣害問題が深刻化し、狩猟者の激減とシカ、イノシシの個体数調整は完全に行き詰まっている現状と、シカの野放図な食害により森林原野の荒廃は広域的に進み、土砂災害などの多発が予想される状況を踏まえ、①奥山で絶滅種のオオカミを再導入すること、②里山・人里では、ハンターの自治体雇用による常勤体制化を図ること。③広域的で、半恒久的な有害獣侵入防止柵の建設が必要である。と3つの緊急対策を提案しているようです。

オオカミは怖い、人を襲うという話は、グリム童話にオオカミが出てくる話だそうで、

それはヨーロッパが放牧を中心とした文化だからと言われていています。ヨーロッパでは牧場のヤギやヒツジをオオカミは狙います。従って、ヨーロッパの人たちにとって、害獣はオオカミであったという事です。一方、古来日本では、オオカミは、山を守る大きな神として崇められ、大きな神「大神」として、信仰の対象でありました。オオカミという漢字はけものへんに良と書きます。

農耕民族の日本人にとっては、農作物を荒らすイノシシやシカ、タヌキなどの害獣を捕食するニホンオオカミは自然と共存する良きパートナーだったのかもしれませんが。

ただ、一口にオオカミを放つと言っても、私は簡単にはいかないと思います。既にニホンオオカミは絶滅していて、大陸オオカミの導入となれば、外来種であるという点。麓の住民の理解や登山や参拝者あるいは観光客への影響、さらには、百年前にオオカミが存在していた環境と比べると今の日本は大きく変わってしまっている点、またオオカミへの対処法を知らない私たち日本人。現実的には、かなり大きな課題があるように思います。

「オオカミの再導入」に対して賛否が分かれるところではありますが、私は専門家ではありませんので、よくわかりません。そこで知事にお尋ね致します。知事は「オオカミの再導入」に対して、どのようなご所見をお持ちになり、調査研究に値するものなのかどうか、お聞かせ下さい。

また、自然の生態系と言うのは、数万年という歳月の中で絶妙なバランスの上で構築されています。日本オオカミという捕食者の絶滅により、生態系が崩れてシカが増えすぎ、その結果、自然環境に様々な悪影響を与えています。捕食者絶滅によって崩れた生態系を改善するために何をしなければならないと知事はお考えでしょうか。大所高所からご意見をお聞かせ下さい。

一方、私がシカ対策の解決策として目を付けたのが、奈良公園周辺に生息する国の天然記念物のシカであります。奈良では平城に遷都した1300年前からシカと共存してきたと言われていています。そこで、奈良県庁の農林部の鳥獣対策と県土マネジメント部まちづくり推進局の奈良公園室に、有害獣のシカの駆除と天然記念物のシカの保護という、それぞれの立場から興味深く話を聞くことができました。

説明しますと長くなりますので、私の結論から申しますと、英彦山に適した捕獲方法と体制を考えた上で、野生のシカを餌付けし、将来はシカによる観光地化していく。人間によって個体管理をすることにより、適性頭数を維持し、ジビエを安定的に提供していく取り組みを考えてはどうかと思いました。問題は、生息域や個体数の把握、群れごと捕獲するための誘導システムをどうシステム化し構築するのかという事であります。シカは学習機能が発達していますから、学習させない方法の確立も求められます。

先日、IT業界の方々とこの件について意見交換し、赤外線カメラを搭載したドローンや臭いセンサーなど最先端テクノロジー活用の必要性を感じました。今、求められているのは集中的に捕獲する高度な技術だと思います。農林水産省や環境省でも、ITを活用した総合的な取り組みを推進しています。

そこで知事にお尋ね致します。繁殖の一途を辿るシカに対して、県は、どのような具体的対策を研究されているのでしょうか。国の支援を最大限活用して、本県としてシカ対策強化策を打ち出すべきだと考えますが、知事のご所見をお尋ね致します。また、耶馬日田英彦山国定公園のように県境をまたいだ取り組みについて、例えば大分県との連携を今後どう取り組んでいくのか、併せてお答え下さい。

今回の質問は、これまでのどの質問よりも、体力と時間を要しました。恩師と県執行部のご協力を頂き、家族を巻き込んだの質問であります。知事には、涙ぐましい努力をご理解頂き、内容のあるご答弁をお願い致しまして、私の一般質問を終わります。ご清聴ありがとうございました。